

二〇一五年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから13ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答题紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

午後の一時間目は、坂崎先生の社会だ。もうとつづくに始業のベルは鳴っていたのだが、ぼくたちはかまわず鬼ごっこをしていて、そこに先生が入ってきた。校長先生も一緒だったから、ちょっと不思議な気はしたものの、そんなことよりもぼくは鬼だった。一人が校長先生に気をとられているすきに、タッチ。次はお前が鬼だ！

そのとき、

「みんな、席について」

坂崎先生は言った。顔が青い。

「お願いだから」

いつもと違う様子に、皆、顔を見合わせながら席についてた。何かふつうではない話があることを覚悟したのだが、でも先生は何も言えずにうつむいた。教室が軽ぐざわめく中、坂崎先生にかわって校長先生が口を開いた。

「悲しいお知らせをしなければなりません」

校長先生がジュンのことを伝えたその瞬間、教室にはあいまいな沈黙が広がった。奥村君が亡くなりましたって、いったいどういうことだ？

何人かはそっと振り向いて、教室の一番うしろ、右端のジュンの席を見た。おそるおそる、ぼくも見た。そこはあ

いていたけれど、それってそういうことか？

こういうとき、どうしたらいいのか、誰もわからなくて呆然としていたのだが、坂崎先生が手本を見せた。校長先生の横でうつむいていた先生は、肩を震わせ、

「こんなことって。悪いことなんかなんにもしてないのに、どうして」

と言うと、わーと声を上げて泣き出したのだ。

それからだ。教室じゅうが堰を切ったように泣き出した。みんな泣いている。先生も泣いている。これは泣かなくてはやばいぞ。ここで泣かなかったら、人でなしだ。

よし、ぼくも泣こう、そう思って鼻から息を吸い込んだとき、校長先生が手をあげた。

「みんな、静かに。目を閉じて、もくとうをしよう」

目を閉じたら、そこは暗闇だった。でも、左右がちかちかと瞬いていて、なんだか長いトンネルの中を、電車に乗って走っているようだった。このまま目を閉じていると、永遠にこの暗闇から出られなくなるんじゃないか。ぼくはこわくなって、そっと目をあけてみた。まわりを見まわす

と、皆、目を閉じていた。しつかりと閉じ、まぶたから涙の粒が押し出されていた。坂崎先生も校長先生も目を閉じて、揺れていた。

ぼくは一人だけ教室に戻ってきてしまったような気がして、もう一度目を閉じようとした。そのとき、ぱっと校長先生が目を開けて目があった。

校長先生は、ちよつと驚いたような顔をしたけれど、そのまま教室を見渡すと、

「はい、みんな目をあけて」

と言った。

「いい友達を亡くして、皆、つらいだろうが、早く立ち直ろう」

先生は、坂崎先生に小声で、「しつかり」と言うと、ゆっくり教室を去っていった。

いい友達、か。

ぼくはジュンをよく知らない。おとなしくて、決して目立つ子ではなかった。確か目が細くて、色白でくちびるの色が赤い……それくらいしか印象がない。でも、確かに昨日まで一緒に教室で勉強していて、たぶんちよつとくらいは話したことがあって、それがもういない。もう話せない。

い。それはどういふことなのだろう。よくわからないでいるところにもってきて、「立ち直ろう」、その言葉がぼくを宙ぶらりんな気持ちにさせた。

その日は、それから最悪だった。坂崎先生は声がよく出ず、言葉にもつまる。授業を受ける方もしょんぼりして、何人かは泣いている。ベルが鳴ると、先生はあたふたと教室を出ていって、するとまたみんな、グループに分かれて泣き出した。そんな中で泣けないことは肩身が狭いことだった。

ぼくは人間的に欠陥があるのだろうか？ いたたまれなくなつて屋上に出ると、智昭と祐がいた。同じ思いでいることがすぐにわかつて、ぼくたちは苦笑いした。

葬式が終わると、もう誰もジュンのことを話さなくなつた。話してはいけないようでさえあつた。ジュンの名前を消し忘れた名簿があつたり、ひよんなことでジュンの話が出たりすると、なにやら気まずい雰囲気ふんいきが漂つたのだ。

久々にジュンの話が出たのは、四十九日がすぎ、ジュンのお母さんがジュンの記念のパーパーウェイトを学校に持ってきてくれたときだった。みなさん、お葬式に来てくだ

さつて、ありがとう。淳也のことを忘れないでやってください、とお母さんは涙ながらに言った。みんな涙ぐみ、しつかりとうなずいたのに、翌日には、もうジュンの話をする子はいなかった。でも、ぼくたち三人は話すし、それまでも話してきた。学校の帰りや休み時間に。話さずにはいられない。ジュン、あるいはジュンのことで泣いた、ぼくたち以外の「心やさしい」人々について。

もつとも謎なのはミーコだ。葬式の日、身体じゅうの水が抜けるのではないかと思えるほど泣いていたミーコが、その翌日、アイドル歌手の新曲を覚えたといつて、得意げに披露していた。

それはずっと泣いていることなんてできないし、校長先生の言ったように立ち直らなくてはならない。でも、立ち直りがちと早過ぎはしないかい。不気味だとさえ、ぼくは思う。

坂崎先生もそうだ。江戸幕府が関所で旅人をきびしく調べたというところで、さあ〜て問題です。幕府は江戸に武器が持ち込まれることを禁じましたが、江戸から出ることを取りしまったものがあります。それは何でしょう？ っ
て何だよ。授業をクイズ番組にするな。皆を元気づけて教

室を明るくしなければならぬと思っっているのかもしれないけれど、だからといって、わざとらしくおどけてみせること、ないじゃないか。

この「大学出たての若い」先生を、お母さんはよく思っていないみたいだったけど、ぼくはけっこう好きだった。ほかの先生みたいに偉そうではなく、友達みたいで親しみやすい先生だと思っっていたのだ。でも、あれ以来、何を考えているのかわからなくて、近づきにくい気がしている。

あれだけ泣いたなら、もつとずつとおとなしくしてろ、とぼくたちは思う。泣いた奴らがふざけているのを見るのは、たまらなく不愉快だ。今、笑っていいのは、あのとき泣かなかったぼくたちだけではないのか。でも、とうとうジュンのためにひと粒の涙さえ流しそびれてしまった「冷たい」ぼくたちは、いまだに笑えないのだった。

だって、人が死んだんだぞ。笑っていられるか。机は今日も三十六個。でも、ほんとうは三十七あったんだ。ジュンは消えた。こういうことってあるんだ。

そして、こういうことがあるのなら、どうしてそれがジュンだったのだろう。祐のお父さんが言った、「いい子だったから、神様が早くお召しになったのだ」という言葉が、

ぼくたちの間に波紋を広げていた。

「キリスト教では、死ぬことは永遠の命をもらうってことなんだ。だから悪いことじゃないんだけど……」

祐があやふやな口調で言ったのを、

「全然わかんねえよ」

智昭が途中でさえぎった。

ぼくもまったくわからない。いい子だから早く死ぬようにするのだとしたら、祐には悪いけど、神様は相当に残酷だ。

でも、クリスチャンではないのだが、お母さんもこの間、ぼつりと言っていた。父母会があり、いろいろ聞いてきたらしい。

「淳也君って、すごくいい子だったんだって。そんないい子だから、早く亡くなったのね……」

どうして、いい子だったら早く死ぬんだ？ いい子にしてろ、いい子にしていたら、小遣いをあげてやる、新しいグローブを買ってやると言われたことがあったけれど、いい子にしていたら早く死んで、小遣いもほしいものも何ももらえないってことじゃないか。

悪い子だったからばちがあたったと考える方が、ずっと

自然だとぼくは思う。あの日、坂崎先生が取り乱して言った、「悪いことしてないのに、どうして」というのは当然の疑問だ。

ある日の帰り道、ぼくたちはまたジュンのことを話して、

「もしかして、ジュンって実は悪い子だったんじゃないかな」

と、ぼくは言った。言ってから何だかあわてて口を覆ったが、

「かもな」

と智昭が言った。同じことを考えていたのかもしれない。

「そうじゃなかったら、ジュンが死ぬわけがないってことだな」

祐が腕組みをして言った。

「宿題。ジュンの悪いところを思い出してくること！」

智昭が勇んで言った。

たしかに死んだ奴の悪口を言うのは、どうしてかはわからないけど、いけないことをしている気になる。生きてる

奴の悪口を言うのもほんとうはいけなさんだけど、それとは違ってちよつとこわい。でも、あえてしなくてはならなかった。ジュンの死んだ理由をなんとしてでも見つけなければ。そうでなかったら、ぼくたちの誰かが死んだのかもしれなかったのだから。

けれど結局のところ、悪いところは見つからなかった。あいつは、あまりにもさりげなく、くやしいくらい完璧かんぺきだった。

次の日、智昭も祐も目を赤くして登校してきて、言った。

「あいつ、いい奴だったんだな。どうしてぼくたち、友達じゃなかったんだらうな」

終業式の日、ぼくたちはまた石を蹴けりながら帰った。ぼくたちは、たいてい何かおもしろくないことがあって（人生って、こういうものかな）、よくこうして石を蹴りながら帰るのだ。

ぼくは成績が下がったことを、お母さんになんと言いつけをしたらいいかわからずに石にあたり、それから、やはりこの間の先生の言葉が引つかかっていた。

「なんでジュンのせいなんだよ」

ぼくは言った。

「成績が下がったのは、ぼくが勉強しなかったせいなんだ。

ジュンとは関係がない」

すると、

「大人って、ほんとになんでも理由をつけるよな」

しみじみと、智昭が言った。

「この前、ぼく、道で転んだのね。そうしたらお母さんが、きのう妹を泣かせたから転んだりするんだって。いったいどういう関係があるんだ」

「ばかばかしい。たまたま転んだのに、くだらない理由をつけて」

祐がさめた口調で言った。

「大人ってなんでも理由をつける、か」

ぼくは智昭の言葉を繰り返した。

お母さんもそうだ。お母さんは何かといえは、お父さんとどうして離婚りこんしたかを言いたがる。聞いてもいないのに、お父さんはいくらいやだと言つてもたばこをやめてくれなかったの、だから別れたのよね、お風呂ふろのふたをしめないところがいやだったのよね、別れたのは正解だったの

よ。

また、ぼくはたまに一人でお父さんと会うのだけれど、お母さんは、ぼくを連れてゆく道々、必ず言うのだ。あなたのお父さんだから、会っていいのよ。あなたには、お父さんなんだから。

それはそうなんだけど、ぼくはあまりいい気はしない。

「ほんとうにいちいち理由をつけたがるよね」

つまり、ぼくの成績が下がったことに、先生も理由がほしかった、ということなのだろう。

「大人って、理由がないと困るんだろうな。何でも理由をつけないと受け入れられないんだ。弱い奴らなんだよ」

祐がまた大人びた口調で言い、言ってから、はたと立ち止まった。それは智昭とぼくも同時だった。

三人、ゆつくりと顔を見合わせると、それぞれの顔に、じんわりと笑みが広がるのがわかった。それからぼくたちは、声を出して笑った。今まで心のどこかにあったもやがいつきに消えて、どうしたんだろう、ずっと遠くまで見渡せる気分だった。ものごとがわかるというのは、なんとすつきりと気分のいいことなのだろうか。

「ジュンは、ただ死んだんだよ」

智昭が言った。

「理由なんてないんだ。あいつは、理由もないのに死んじやったんだ」

いい子だったからでも、悪い子だったからでもない。ただ、死んでしまったのだ。

ぼくたちは、ようやく解けた謎に興奮して、体操着の入った袋をぐるぐるとまわしながら夕焼けの町を歩いていった。むろん、石なんて蹴らない。腕を振り、元氣よく歩いていった。

でも、しだいに腕が重たくなってきた。勢いをつけないと振れなくなり、とうとう勢いさえもつかなくなって、体操着の袋をだらんと下げて立ち止まった。

「かわいそうだな。理由がある方がまだよかったよな」

祐が言った。三人、同じ思いでいた。

^H「くそや、初めて涙が出るぜ」

智昭が言った。祐もぼくも、泣いていた。

(ありよしなまお『有吉玉青』ぼくたちはきつとすごい大人になる』による)

問一 — 線部 A「おそろおそろ、ほくも見た」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 振り向いたらジュンの幽霊ゆうれいがいるような気がしたから。

イ ジュンが亡こわくなったことを確かめるように恐こわかったから。

ウ 先生の話の途中で後ろを向くと、怒おこられそうな気がしたから。

エ 他の生徒と同じように行動するのを周りに知られるのが嫌いやだったから。

問二 — 線部 B「堰を切ったように」を他の言葉に置きかえた場合、適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時を移さずに

イ 間髪かんはつを入れずに

ウ 火の付いたように

エ 舌の根の乾かわかぬうちに

問三 — 線部 C「宙ぶらりんな気持ち」とは、どのような気持ちか。「ほく」がジュンの死をどのようにとらえているかをふまえて、説明しなさい。

問四 — 線部D「人間的に欠陥がある」とあるが、これと同じ意味で使われている言葉を文中から五文字以内で抜き出しなさい。

問五 — 線部E「なにやら気まずい雰囲気が漂ったのだ」とあるが、それはなぜか。ジュンの「死」について、クラスのみんながどのように考えているか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスのみんなは、ジュンがいい子だったから、神様に早く召されたと思っていて、ジュンが死んだということに納得しているから。

イ クラスのみんなは、ジュンの死をもう忘れてしまっていて、ジュンのことを話すことで、ジュンの死を思い出すことを恐れているから。

ウ クラスのみんなは、ジュンの死を悪いことと思っていて、そのため、クラスに起きた悪いことはあまり話してはいけないような気がしているから。

エ クラスのみんなは、ジュンの死をできるだけ早く乗り越えようとしているので、ジュンの話をするのは立ち直る妨げになると感じているから。

問六 — 線部F「何を考えているのかわからなくて」とあるが、「ぼく」が理解できないのはどのようなことか、説明しなさい。

問七 — 線部G「ぼくはあまりいい気はしない」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問八 — 線部H「くそう、初めて涙が出るぜ」とあるが、ここまで泣くことができなかつた「ぼくたち」がここで「初めて」泣いたのはなぜか。「教室のみんな」の涙との違いが分かるように、百字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「眠る」ということばから、なにが連想されるでしょうか。文字どおり、「睡眠の状態」を指す以外に、いろいろな意味があります。

「眠る」ということばは、しばしば「」という意味で使われます。たとえば、「彼の才能はまだ眠っている」というふうには、起きてはいるがなにもしていない、という状態を表わすのです。「1」、むだに存在しているだけ、という否定的な意味も込められていますし、さらには、死んだも同然という受け取りかたもされています。ぐうたらな私たち凡人は、ふつうにちゃんと起きているにもかかわらず、賢人や聖人から「目を覚まさない！」と叱られるのも無理はありません。

「2」、本来の睡眠は、本当に無活動の状態、つまり空白の時間なのでしょうか。睡眠は価値のないもの、捨てるべきものなのでしょうか。答えはノーです。また、睡眠はできるだけ切り詰めるべきものなのでしょうか。この答えもノーです。

現代の脳科学があきらかにしたところによれば、睡眠と

は能動的な、そしてたいへん重要な生理機能が脳によって営まれる時間域なのです。睡眠は、生物界に広くみられる活動と休息のリズム現象をもとに、発達してきました。そして、脳の進化とともに、大きく発達した大脳をうまく休ませる機能が拡張されてきたのです。

睡眠不足のとき私たちが感じる不愉快な気分や意欲のなさ、身体ではなくて大脳そのものの機能が低下して、大脳が休息を要求していることを意味しています。

睡眠がうまくとれないと、大脳の情報処理能力に悪い影響が出ます。ですから、睡眠を実行するために、そして、睡眠のあとうまく目覚めるために、高等動物は進化の過程でさまざまな方法を開発してきました。こうして高等動物の眠りには、浅いものから深いものまで、いろいろな段階の睡眠が分化しました。

その結果、私たちの睡眠は、大脳のためであるといってもよいくらいに特殊化しています。この大切な機能を私たちは自覚することができません。睡眠機能は私たちの意思を離れて、無意識のうちに自動的に実行されるからです。

そして、私たちがこの機能を自覚できるときは、その機能になんらかの不都合が生じ、起きている時間域に悪い影

響をおよぼす場合です。現代を特徴づけるストレス、時差ぼけ、不眠と過眠などの睡眠障害です。ひとくちで言えば、生活の質が悪くなった時です。

自然物とくに生き物は、過去の体験が現在の状態に反映され、それがまた未来の活動に影響をおよぼす、という時間の流れに縛られています。生体の能動的な活動は、能動的な不活動を要求するのです。この因果関係のサイクルに眠りは組み込まれています。

ですから、睡眠は単なる活動停止の時間ではなくて、高度の生理機能に支えられた積極的な適応行動であり、生体

防御技術です。とりわけ、発達した大脳をもつ高等動物に

とっては、睡眠の適否が高次の情報処理能力を左右することになります。質のよい眠りをとらないかぎり、質の

高い生活ができません。「よりよく生きる」ことは、

【 3 】、「よりよく眠る」ことなのです。

(井上昌次郎『ヒトはなぜ眠るのか』による)

【注】

*能動的——進んで働くこと。

*生理機能——生物体の生活現象のはたらき。

問一 【 1 】 【 3 】 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア とはいえ イ とりもなおさず ウ なぜなら エ また

問二 に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 落ち着いている イ 考えていない ウ 黙っている エ 働いていない

問三 — 線部A「ぐうたらな私たち凡人は、ふつうにちゃんと起きているにもかかわらず、賢人や聖人から「目を覚ましなさい！」と叱られるのも無理はありません」とあるが、なぜ無理はないのか。「賢人・聖人」と「凡人」の違いを明らかにして説明しなさい。

問四 — 線部B「高等動物の眠りには、浅いものから深いものまで、いろいろな段階の睡眠が分化しました」とあるが、次のうちでその説明として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 授業の合間の休み時間だけでも睡眠をとることで、頭がすっきりする、ということ。

イ 夢を見る浅い睡眠か、夢を見ない深い睡眠か、自分の気持ち一つで管理できるようになったということ。

ウ 何時間かまとめて睡眠をとらなくても、短時間の睡眠を繰り返すことで、睡眠時間を満たせるということ。

エ 日頃睡眠不足でも、休日に長時間の睡眠をとることで、ある程度の体調管理ができるようになったということ。

問五 — 線部C「この大切な機能を私たちは自覚することができません」とあるが、「この大切な機能」とはどういう機能か。具体的に表しているところを文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問六 — 線部D「質のよい眠りをとらないかぎり、質の高い生活ができません」とあるが、なぜ「質のよい眠り」が「質の高い生活」につながるのか、あなたの実体験を含めて説明しなさい。

三

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① 試合はエンチヨウ戦に入ったところだ。
- ② 兄はオンコウな性格だ。
- ③ シユウトクブツを届ける。
- ④ 心和話を聞いた。
- ⑤ これはゼンダイミモンの出来事だ。